

あなたの1ミリがまちを変える。



男女共同参画in沼津の 視点から。

佐藤さん

女性技術者として開発職に従事。沼津市男女共同参画推進委員。フレキシブルに働きつつ多忙な子育てに奮闘中。

犬塚協太教授

静岡県立大学国際関係学部教授。専門は家族社会学・ジェンダー社会学。沼津市男女共同参画推進委員会委員長。

石山さん

市内建設系中小企業スエヒロ工業の人事担当。2児の母。フリーアナウンサーとしても活動中。



変化の芽は確実に。

犬塚 男女共同参画を進めるキーワードのひとつが、地域と企業の「生き残り」です。若い女性の地方流出と人手不足が深刻な今、多様な人材が定着・活躍できる職場をつくることは経営戦略そのものです。沼津のまち、沼津の企業も例外ではありません。

石山 「中小企業には難しい」と思われがちですが、規模が小さいからこそ一人ひとりに丁寧に向き合えるという強みがあると日頃から感じています。

佐藤 育休制度は本当に変わりましたよね。私が入社した10年以上前は男性育休はほぼゼロでしたよ。

犬塚 育児支援が無意識のうちに女性だけに向きがちなのは「好意的差別」と呼ばれます。善意からくる差別です。男性にも積極的に育児参加を促すことで、ようやくバランスが取れてくるんです。



働きやすさの、話をしよう。

男女共同参画——その言葉を聞いて、「自分には関係ない」と感じる人も多いのではないだろうか。しかし、それは私たちの日常そのものに根ざしたテーマです。今回は有識者・女性技術者・企業の人事担当者という異なる立場の3人が、それぞれのリアルを語り合いました。

意識は変わった。でも、現実は何？

犬塚 今日は、来月6月が「男女共同参画推進月間」ということで、職場におけるジェンダー（社会的性差）をテーマにお話をする機会をいただきました。

石山 よろしくお願ひします。

佐藤 私は、沼津市の男女共同参画推進委員を務めています。沼津市の市民アンケートでは、男女共同参画への意識は着実に高まっているんですね。

犬塚 そうなんです。一方で家事・育児の負担は相変わらず女性に集中しているという実態も明らかです。つまり、女性だけが仕事と家事育児の二重負担を抱える構造です。

石山 子供が熱を出した女性社員は在宅勤務に切り替えますが、男性社員はそれを言わずに働いているという状況はあってもいいですね。

切にしているのは①相手を尊重する②助け合う心を持つ、そして③自己開示。自分の譲れない一線をはっきり言葉にすることを夫婦で大切にしていますね。

犬塚 佐藤さんがおっしゃった「自己開示」これこそが大切なポイントです。残念ながら日本の夫婦はコミュニケーションが少なすぎる。

石山 「おい」と声をかければ妻がお茶を出す、みたいな夫婦関係ですか。言わなくてもこのくらいわかってくれるだろうとせず、どのようなコミュニケーションが望ましいのでしょうか。

犬塚 相手を尊重しながら自分の意志をきちんと言葉にしてネゴシエーション（交渉）する。その積み重ねが家庭、職場、ひいては地域全体を変えていきます。**佐藤** なるほど。近い人とのコミュニケーションはそんなに難しいことではないですね。

犬塚 そうなんです。男女共同参画は特別なことではありません。身近な「当たり前」を見つめ直すことが出発点です。どこから始めてもいい。小さな実践が、このまちを少しずつ変えていきます。

石山 男女共同参画について専門的な見聞から教えてもらいましたが、難しく考える必要はなさそうですね。

佐藤 新たな気づきもありましたし、すでにできていることもあったような気がします。今日はありがとうございました。一同 ありがとうございます。

犬塚 そうなんです。そういった状況の根底には「アンコンシヤスバイアス（無意識の偏見）」があります。表面の意識は変わっても、根底にある職場の慣行や家族・地域全体の仕組みが変わらない限り、ジェンダーギャップはなかなか埋まりません。

身近なジェンダーギャップ

犬塚 女性も「自分がやらなければ」という意識が強く、夫に頼むより実家を頼ってしまう。結果として職場でも家庭でも女性に負担が集中しがちです。

佐藤 私は理系出身で研究開発職なのですが、女性がかく少ない。「女の子が数学や物理を勉強してどうする」と言われた経験もあります。

石山 リケジョも現場女子も増えてもって活躍してほしいですね！

佐藤 子供会の会長をしています。自治会の意思決定の場は男性が多く、逆に授業参観はお母さんが圧倒的に多い。こうした「当たり前」の積み重ねが、ジェンダーギャップを生み続けているのだと思います。

犬塚 そのとおり。実は誰かが意図的に差別しているわけではないんです。「なぜ女性が少ないのか」と問い直してみると、実は合理的な理由がなかった、ということも多い。気づきに変化の出発点になります。



1ミリがまちを変えていく。

男女共同参画は、特別な施策ではなく、私たちの日常の中にある身近な課題です。「男性は仕事、女性は家庭」といった固定的役割分業意識は弱まりつつあるものの、アンコンシヤスバイアス（無意識の偏見）として、今も進路や働き方、家庭での役割分担に影響を与えています。自分では平等に考えているつもりでも、何気ない言葉や慣習が可能性の幅を狭めていることがあります。

一方で、変化は大きな制度からではなく、小さな実践から始まります。会議で全員が発言する工夫や、育児休業を「特別」にしない職場の空気づくり。家庭で「手伝う」ではなく「どう分ける」と問いかけること。完璧を目指すのではなく、できることをひとつずつ続けることが社会を少しずつ変えていきます。

まずは身近な「当たり前」を見つめ直してみませんか。そして、それぞれの立場でできることから一歩を踏み出してみよう。完璧を目指すのではなく、まずは一歩踏み出してみる。あなたのその1ミリの変化が、家族を、職場を、このまちを変えていきます。



地域自治課
055055-9344-48007